

# チユリ

〜東方少女催淫〜





目を  
走らせる



一本に



本を  
読む事は  
その内容を  
自分に  
取り込む事

その内容で  
自分を  
染める事



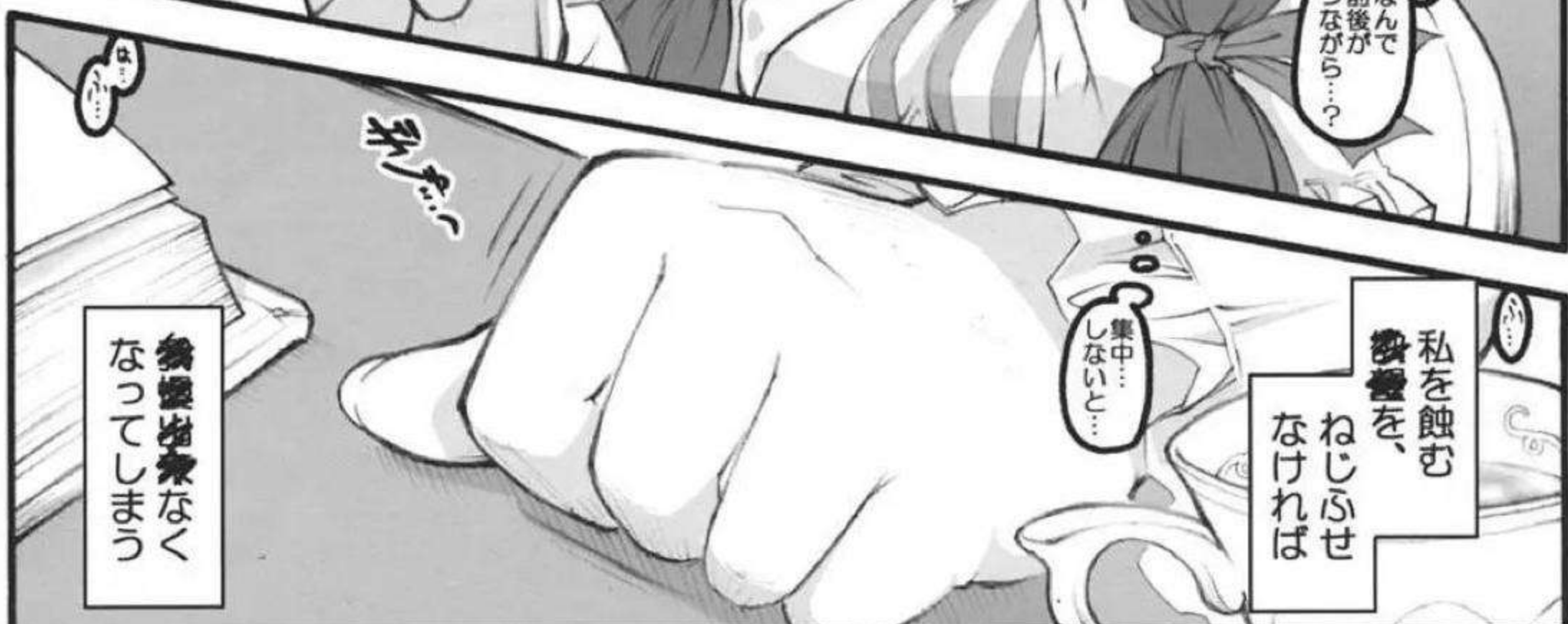
けれども今は  
内容がちっとも  
頭に入っていない

あれ...  
なんで  
前後が  
つながら...?

それでも

本を読んで  
いなければ

いつも通りに  
していなければ



私を蝕む  
蠱毒を、  
ねじふせ  
なければ

集中...  
しないと...

蠱毒が  
なくなると  
なってしまう

今では、  
図書館全体を  
満たす、

この「香」

これの、  
せいねー

この香りを  
かいては、  
意識を向けては、  
いけない。

何か、  
別の香りをー

紅茶をー

紅茶を、  
飲まない、  
とー

ふふふふ

ふふふ



ふふふ



ふふふ

ふふふ



しまった…

こぼれた  
紅茶が  
湯気をたてる

図書館に  
染み付いた蜜と  
混ざり合った、  
湯気を

あ



だめ…

だめ、だ…

こんなにも  
強く、  
この香りを、  
かいてしまっ  
ては、

も…  
我慢…  
できない…

もう…

あ



私を侵食し、  
私を塗り潰し、

私を変えてしまう。  
私をおかしくして  
しまう。

はっ  
はっ

あの…  
蜜…  
でも…あれは  
本当に…？



この香りは

この腐り落ちた  
果実の香りは

こんな…どう  
して…私…っ



彼女達から  
滴り落ちる、  
あの蜜が、

この香りを  
たてている  
のだ



彼女達—

今夜も—  
彼女達が—



東方少女催淫

今夜も、  
彼女達が、

やって来た。

私は、  
いつも通り、  
知らんぷりで、

彼女達の行為から  
目を背け、

耳を塞ぐ

あれに  
近付いたら—

あれに  
飲み込まれて

あれと同じ  
ものに—

けれど

「ごっご  
魔理沙。」

私が図書館で  
あるように、

この図書館も  
私自身で、

だから、  
この図書館で  
行われる事に

目を背ける  
事なんて、

私には  
初めから

出来るわけも  
なかった



私から  
隠れるように

アア...



私の目を  
忍ぶように



ゆん  
ゆん  
—けんせき  
私を挑発  
するように



私を誘惑  
するように







咲き  
咲いて

咲き乱れて

する



もうこんな  
なってるわよ?

だ...  
だめだぜ  
アリス...  
そんな...



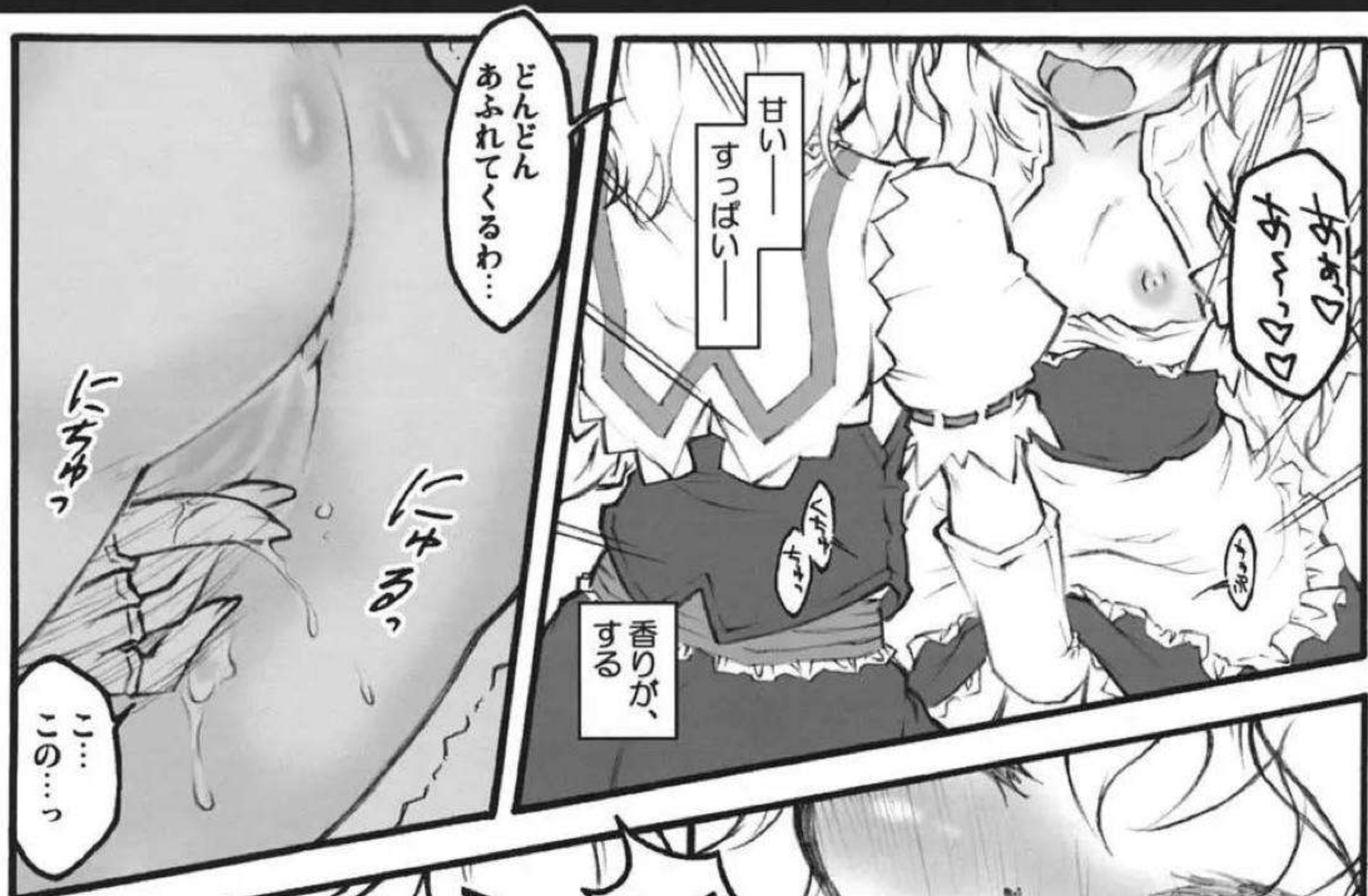
ふふ...  
これだけで  
イっちゃおう?

蜜を  
滴らせる

くち...

くち...

ん...



あふれてくるわ...

あふれてくるわ...

あふれてくるわ...

あふれてくるわ...

にゅにゅ

にゅにゅ

にゅにゅ



ア...アリスも...



ア...アリスも...

ア...アリスも...

にゅにゅ

ア...アリスも...



ア...アリスも...

ア...アリスも...

ア...アリスも...



アリスが  
一方的だから  
だせ……

……か……  
……は……  
……は……

あー

人を狂わせる、

腐りながらにじり  
生い茂り——

花開き——  
実りを迎えた——

ふわふわ♡♡

はっ♡  
ん♡



♡♡♡

果実の、  
香りだ

このままでは



このまま  
こんな香りを  
嗅がされ  
続けたら



はっ

はっ

おかしく  
なってしまう

狂って  
しまう

掻きおろさないと



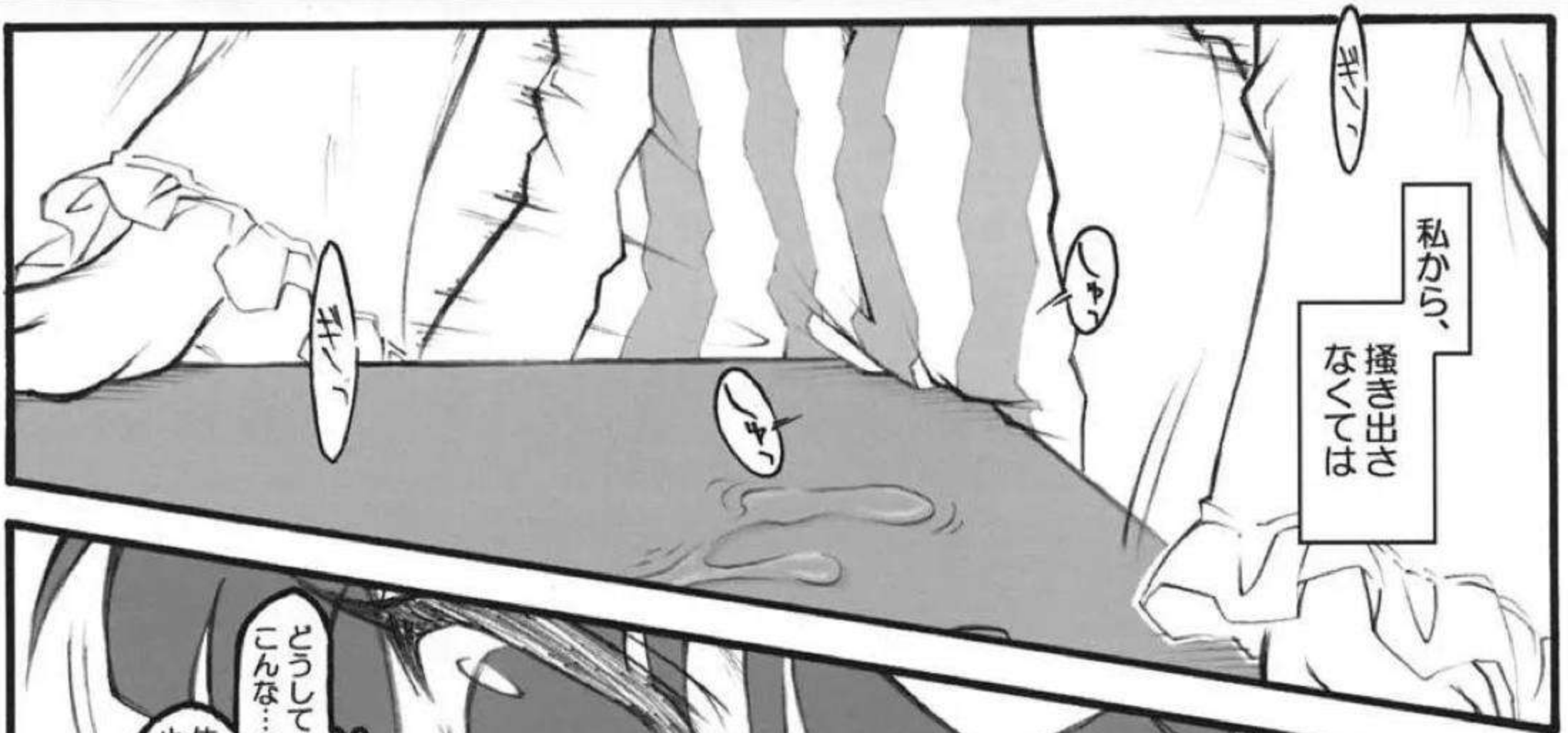
あ...  
...?

私に侵食し、  
私を塗り潰し、  
私を変えてしまう。  
私をおかしくしてしまう。

この蜜を



この香りを



私から、  
掻き出せば  
なぐりま

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ



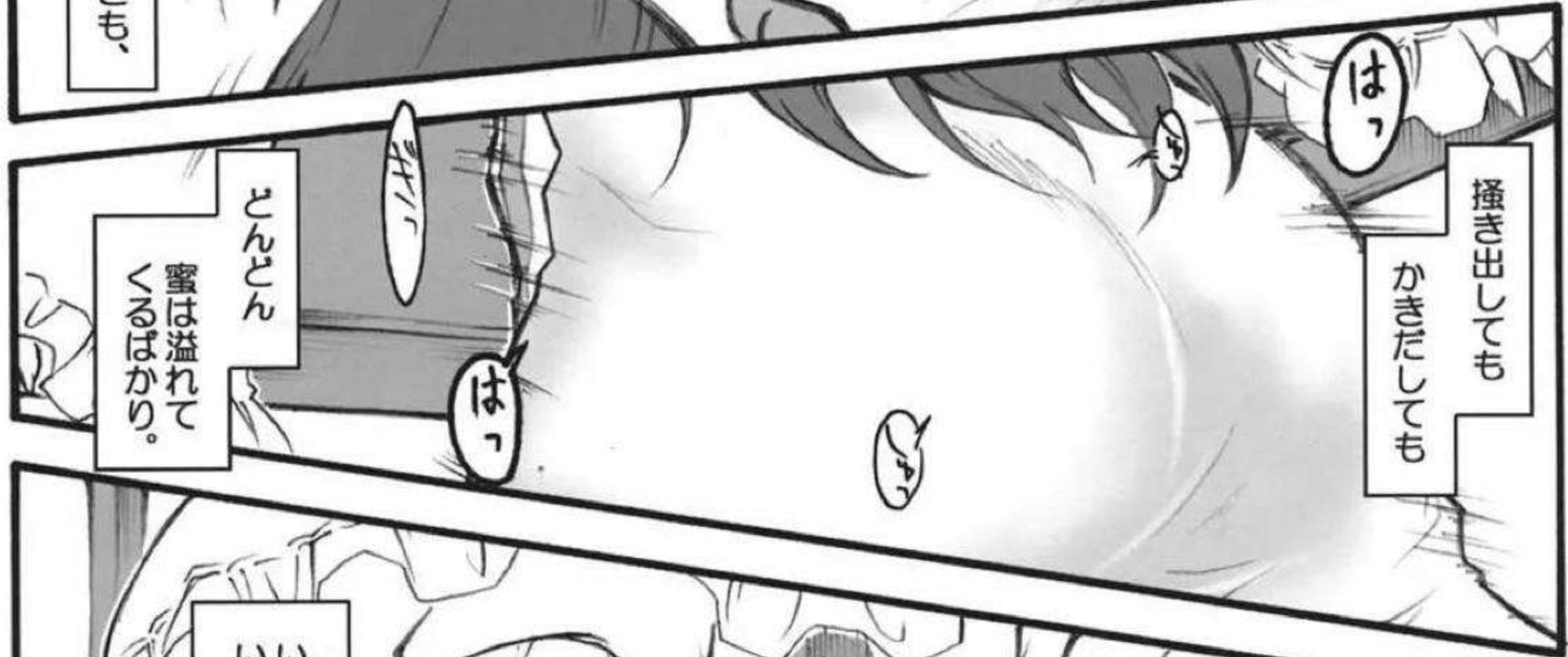
ハッ

は、

とじとじ...  
こんな...?  
体...  
止まらな...っ

は、

——はなひき、



は、

掻き出して  
かきだしても

ハッ

は、

とじとじ

蜜は溢れて  
VNOはがら。



ハッ...

はー

いつまでも  
いくらでも

はー

溢れ続ける

蜜が溢れ  
続けるままに

私は蜜を  
掻き出し  
続ける

——当たり前だ

私が  
私に

何時まで  
経っても蜜は  
止まらない

蜜を  
注ぎ込んで  
いるのだから

けなひき

グッ

ズンズンズン





変えて  
しまっ—？

私は、もう

こんな事しか  
考えられない

これ以外の  
やり方を  
考えつかない

選び直そうと  
思う事も  
できない。

い、や、  
まっ

変わってしまったて  
いるのかもしれない

蜜が私を満たすにつれて

は……

蜜の中に刻まれた記録が

読み取る事が出来るようになっていった

は……

……アノ

アノ

それは——

魔理沙や  
霊夢や  
そしてアリスが

体験した——

あるいは、する——

記録だったのだから。

ん……

……ん

私は、私を満たす蜜の中

ゴ  
ボ  
ク

彼女達の記憶を追体験していった。

霊夢の  
いる店内で  
下腹部を  
まわすられ



そのまま  
男性そのもの」



跪いて  
奉仕した。

口  
精液ばかりか  
尿まで  
注ぎ込まれて

そんな  
屈辱的な行為に  
絶頂を迎えた。





手枷を  
されたまま

後ろから  
アリスに  
敏感な箇所を  
弄ばれ



私に

口移しで精液を  
流し込まれた。

!!?



その味と香りに  
我慢が  
出来なくなり

自分から  
男根をねたり  
処女膜の奥へと  
迎え入れた。

おちんちん……  
おちんちん……

本当に最後  
までいれられ  
たかっただけ  
……



何度も

突いてもらって  
中で出して  
もらって

—けわんも

その度に  
絶頂を迎えた

どんなに  
記憶から

体験をそのままに  
得ることができて

いいえ—

体験を  
得る程に体の

その満たされない  
空虚は膨らみ続けて

もう、私は、

私の頭の中は

記録の中の  
彼女達と  
同じように—

ただ男根の  
挿入を焦がれる  
という、

それだけに  
なっていた

最後に咲夜が  
紅茶を運んで  
来たのは  
何時だったか

今では  
この館の誰も

図書館を  
訪れる事は  
無い。

腐臭を放つ  
容器のフタに

わざわざ手を  
触れる者は  
いない、か。

私の理性を

感情を

感覚を

その全てを  
担うかが

今はもう余剰に  
肥大した快楽と

それを望む  
欲望だけに  
使われている

パチュリー様…

パチュリー  
さまあ……♡

は……

は……  
は……

私がこんな  
状態では

あなたがそう  
なってしまう  
のも当然ね

ああ……

よろ……

この子も私の  
制御の  
及ばない中

私と  
同じように

彼女達の記憶を  
なぞったのだらう

男根の挿入を  
焦がれる

それだけの  
存在へと  
作り変えられ

彼女達の記憶の  
中にいた彼に  
支配されようと  
している

それを、  
彼女自身の力で  
理性を保とうと  
しているのだらう。

は……

は……





けれども  
そんな事を  
しても、



もう  
どうしようも  
ない



この子が  
吸い付いて  
いるものは

すがりついて  
いるものは

私は

私も



もう  
この子と

彼女達と  
同じように

どうしようもない  
と解れない

解っていても  
止める事が  
出来ない

蜜そのもの  
なのだから。

あ……



いいわよ  
おいで

す



私が…  
受け入れて  
あげる

—なんて、  
欺瞞。



この子が  
こうなって  
しまったのは

あ  
あ  
あ

他の  
誰も  
ない  
私のせい  
だというの

あ

びやる  
快楽に  
降伏した私が  
この子に  
こうある事を  
望んだから

この子は  
こうなって  
しまったというの

でも

ニハニ

これでいいとしか  
思えない

アハハ

これがいいと  
思ってしまった

もっと

もっと注ぎ  
込まれたい。

アハハ

もっと

もっと注ぎ  
込みたい。

アハハ

もう、  
これでいい

あ  
...

この、  
渦の中へ

サ

サ

サ

サ

おっ——

サ

サ





すず...

そこに彼女達が  
いるような

そんな  
気がして

本当の本当に  
体を触られて  
いると

本当の  
本当に

それが

そんな事が

そんな事だけで、  
すこく

アア

ア

ア

ウ

——聴きかきして



あーん  
あーんあーん

あーん

行為の  
ひとつひとつ

乳首を  
こねられ  
秘部を  
まさぐられる

あーん  
あーんあーん

より意識  
こころ  
しめこ。

より快感を高め  
られてしまふ。

歯止めが、  
きかなくなる

あっ…

私を  
満たすものが

私から  
あふれ

なに  
それ…っ

も…

ずず…

も…

私ごと

流れて

押し流されて  
しまっ—





こんなの…  
入れられ  
たら…っ♡

—チビッ、



まさか—

とうに蜜で  
満たされた私が  
それでも羞恥を  
感じたように



入れ…っ

それも、  
それさえも嘘

…？



知性そのものの  
私は、  
どこまで  
流れても

膜を破る  
だけの力が…  
無い、  
の—？

そこから  
切り離される  
事は無い

「……」  
「……」

それでももう、  
私は、

知性を、  
ごまかして  
——ごまかされました」

理性を、  
なだめすかして  
——なだめされました」

「……」  
「……」

「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

それでも、  
なんとか

この快樂に、  
すがっていくしか  
無い



あ…？

せつなさの余り  
気を失って  
いたのか

彼女達にここへ  
運び込まれた  
らしい。



あ…？

す  
ぽろ

…？



けれど、  
今の私は

図書館から  
引き離された  
事も

やっと目が  
覚めたみたい  
だな

この子を  
大人しく  
させるの

大変だったん  
だからね…っ

こんな場所に  
連れてこられて  
しまった事も



何も感じない。  
どうでもいい。

今の私は、  
ただ、

……っ

ただ—  
それを

彼の股間から  
生えたそれを



この奥へ  
入れて欲しい  
という

おれを...  
おれを...

おれを...  
おれを...

ただ、  
それだけ



おれを...  
おれを...

おれを...  
おれを...

どんな事でも

—例え、  
奥底で、  
理性が疼いた  
としても

出来てしまひ。

おれを...  
おれを...

そのためなら、  
どんな事でも、  
する

やり方は、彼女達の  
記憶に、さんさん  
教えられている

おれを...  
おれを...

おれを...  
おれを...

おれを...  
おれを...

おれを...  
おれを...

おれを...  
おれを...

これを  
目にして

臭いを嗅いで  
ぶれて

その度

この、  
膜の内側へ

は...

今度こそ...  
本気で...

迎え入れる事を  
想像して

それを、  
ここで、

何年も、何にも  
許していない、

入...るの...?  
入れて...  
もらえるの...?

欲しくて、  
たまらない。

私の...  
処女膜の  
奥に...

これ...

これが欲しい  
という、

それだけに  
なってゆく



刻み  
つける  
刻んで  
ゆく



男根が、  
陰唇をねじ入り

処女膜を破り

膣道を押し抜け



子宮腔をしくみこむ



その行為を、  
私に

私の理性に、  
私の心に、  
刻んでゆく



注ぎ込んで



そうして  
刻みつけて



浴びせかけて

塗り込めて

変えてしまえ



変えてしまえば、  
いい

いや、  
変えて欲しい

——あつ

奥底に  
疼くものさえ

きれいな  
わっほ



なにもかも

違う何かに  
なってしまう  
くらいさ。





本に

ええええ？

ええええ？



目を  
走らせる

はあ...

あ...

あ...

その後...  
目を覚ますと



本を  
読む事は  
その内容を  
自分に  
取り込む事

そこは  
地下室だった

その内容で  
自分を  
染める事



は...



建材が  
剥き出しの  
牢獄めいた  
部屋の中に

一っだけ  
周囲から  
浮いたベッドが

本に記された  
知識を、  
自分の物として  
扱う事が  
出来るように



本に記された  
状況に、  
自分を置く事を  
想像して

此処が  
何の為の  
場所かを  
物語っていた

その感覚を  
その感情を

自分の物として  
感じる事ができる





そして  
それに加えて

鼻が、  
曲が

自分で  
自分に

蜜を注いで  
いた私は



アリスが

私が  
私に

魔理沙の言葉の  
通りになって  
しまっていた  
ように



自分も

自分の言葉の  
とおりになっ  
てしまっ  
てしまっ

何度も  
体内を  
掻き回され

欲望を…  
注ぎ…

注ぎ…  
込ま…



私……

イッチキツ……  
イッチキツ……

はっ

はろ

「……おれ……」  
「……おれ……」  
「……おれ……」

はっ

はっ  
はっ  
はっ



言葉の通り

その通り

欲しがって

感じ

絶頂して  
しまっ

はっ  
はっ  
はっ



—こら

そんな事  
書いてなかった  
だろう？

で…っ  
でき…っ

けれども  
いくら言葉の  
通りにイっても

はっ

はっ

はっ



読んでるだけで

その通りに  
感じちゃうのに…っ

本当を

本当の事を  
体験してしまった  
今では

はっ



全然、

入れられてる  
だけなんて…っ

ぬ

物足の  
無くて—



私の奥…

突き上げて…っ



もう…  
がまん  
できないの…

も…っ

好きに…  
動いて…っ

ニニニ♡



私の…  
おまんこ…っ

本物の  
おちんぼで…っ

本物の  
ザーメンで…っ

AS

AS

本当の本当に  
イかせて…っ





グワッ、グワッ、

グワッ、

グワッ、グワッ、

グワッ

グワッ

グワッ、グワッ、

グワッ、グワッ、

グワッ、グワッ、グワッ、

グワッ、グワッ、



كَلْبِي

كَلْبِي

كَلْبِي

كَلْبِي

كَلْبِي

|||

كَلْبِي



自分の言葉通りに  
なってしまうように  
なった私は、

ふる...

こんな風に  
なってしまった私を  
簡単に元に  
戻す事が出来る

どうしようも  
なく、私は、

—けねんま

私の書架  
から

私を気持ち良く  
してくれる本しか  
選ぶ事が  
出来ない

もう、  
私の  
書架には

—それとも

ソソナ  
ホン  
シカ—？

To Be Continued ... ?

